

ウィリアム・ジェームズの宗教論 (2)

鈴木 孝

Religion of William James

by Takashi SUZUKI

In this study, I want to inquire “the religious feeling” in the Varieties of religious experience by William James. The religious feeling is divided into the two types (healthy-mindedness, sick soul). So I compared them with the Self (I and Me). The I is the self as knower or the pure ego and the me is empirical Self, the self as known.

At first I refer to Prof. Pollock’s “Dream and Nightmare.” He emphasizes the Spirituality of americanism from the first historically.

Next I will join James’s Self to his Varieties and I try to indicate the organic structure of the Varieties and his philosophy (radical empiricism).

(1)

ウィリアム・ジェームズ (William James) の父ヘンリーは1811年アルバニーに生まれている。R. W. Emersonより8年のち、H. D. Thoreauより6年さきに生まれている。子供であるW. Jamesにそういった時代的背景は間接的・直接的に影響があったに相違ない。そのようなこともあって、私は大局的なアメリカニズムを、さらに Concord 派(ここでは Thoreau)についても一瞥をあたえながら、Jamesの精神を明確化し、分析をすすめていきたく思う。あるいは、アメリカニズムそのものが、現象として物質文明と繁栄をとりえたことの底流へのアプローチと認識をとおして、W. Jamesの思想、とくに宗教論の位置を考察しようとするものである。具体的には彼の心理学説における自我論と宗教論との関連をみることになる。

(2)

Fordham大学のRobert C. Pollock教授は“Dream and nightmare” (1)という小論のなかでアメリカニズムの根底にあるものが“Spirituality”であるとして次のようにのべている。「包括的な言葉として“物質主義”はアメリカにおける、まさにオリジナルなものをまったく曖昧なものにしてしまう。すなわち、二分化された方法 (Dichotomized fasion) で操作するのをアメリカ人は極度にきらっているのだということを不明瞭にしてしまう。もともと、生活のきびしい緊迫感が事物間の有機的相互連関性の意味をはぐくんできたのであった。だから、神と日常的経験を相互に切りはなしてしまったり、または、精神と物質という明確な二元論を寛容に認めることは不可能なことなのだ。かかる感情的な背景のために、アメリカ人は容易に自然的事実を事物の体系のなかの有機的な場 (organic place) としてうけいれ、それ (自然的事実) を人間の発達の全体性に関するなにか第一義的なもの (primacy) とさえするようになったのだ」(2)とPollockはいうのである。

要するに、Pollockはこの論文で、アメリカの発展史を「有機的構造の感情」から把握しようとしている。たしかに、プラグマティズムの伝統にそのような脈絡があることは一見して同感しうることである。Pollockによれば、このような精神的、有機的地平を育てた人々はJonathan Edwards, Emerson, Thoreau, Whitman等だという。さらに彼は、その典型の一つにShaker教徒をとりあげているのも面白い。そこには、アメリカ精神がより内奥からの緊迫感とともに、宗教的精神表示のかたちではっきりと現れているというのである。すなわち、彼の表現によれば、Shaker教徒達は、なんらかの意味で経験の型を固定化させることをしなかったし、彼等の聖歌は変化とか経験という考えをある具体的、歴史的なものとして尊重もしたという。そして、聖歌はなんらかの意味で経験を組みこむよう工夫されてもいたし、聖歌自身、役に立たなくなればなげすてられたというのである。PollockはShaker教徒を例として考察しながら、アメリカ人は人間相互の関係のみならず、人間と世界の定位のなかで創造的な発展をなしとげたことを指摘したいのであろう。アメリカニズムへの彼の考察はまだ続く。すなわち、われわれアメリカ人はなんとするどい対象的な傾向をつくりあげていることであろう。夢 (dream) を求める道徳的な力、道徳的噴火爆発の力、歴史的創造力をもった内部精神の連鎖のなかにその源泉をみいだす爆発力を認めうるが、反面、いまわしい要素の出現も認めざるわけにいかない。それは、物質的成功主義や、アメリカ人に内在しているノイローゼ的、準精神病的徴候をともなった誤てる道徳観である (3)。このなかで最近の物質的成功主義からの道徳観を彼は、アメリカの悪夢 (nightmare) と名づけている。以上、彼の分析は、アメリカニズムにおけるspiritualなものを再認識することの急務を示すものである。ジェームズの哲学はラディカル・エンプリシズムとしての絶対的多元論の哲学であった。Pollockのいう“American Nightmare”に通ずる契機はそこになかったであろうか。ジェームズの宗教論にさえその契機がひそんではいなかっただろうか。私は宗教論の考察に歩みたいが、そのまえに、ここで、一人のアメリカ人を参考にしてみようと思う。

それはソーロー (D. H. Thoreau 1817~1862) である。彼の主著“Walden”はまたアメリカニズムの一典型であるし、その考察はこの小論にも価値あることと思われる。一体、詩人であり、文学者としてのソーローをいかに考察するかはさまざまであろう。私はここでは“Walden”のなかのHigher Lawsという一章に中心をおくこととしよう。なぜなら、その章はもっとも宗教と哲学の問題を論じたところであるから(4)。

ソーローはHigher Lawsのなかで次のように思考を展開する。彼は森のなかを家路にむかったとき、ヤマネズミを見つけ、野性的なよろこびを感じ、生のまま食べたいという誘惑をつよく感じる。また、少年の頃、ニューイングランドの少年が殆んど猟銃を脊に狩猟にでかけていたことをなつかしく想いだしてもいる。また、食べるための釣りにも心から専心する。一方、魚や虫どもをあわれと思うこともない。このような彼の表現は次の言葉「わたしは善におとらず野性的なもの(The wild)を愛する」に要約される。

ここに、ソーローの人間論の出発点がある。ソーローにとっては、自然のなかで生活することがまず第一に肝要なこととされた。「ただ旅行だけをしている者は物事をただ人づてに半かじりに知るもので権威とするに足りない。われわれは右の人々(生活者)がすでに実地に、あるいは本能的に知っていることを科学が報告するのに大いに興味をもつ。なぜならば、そういうもののみが人間の経験という意味で、真に人間的なものであるからだ」(5)というのである。彼によれば、上記の“the wild”を愛すという表現の裡には、人間の本性としての狩猟人時代を、われわれの一人一人が通過しなければならないという主張がひそんでいたわけだ。第一のかかる“the wild”によって

表される次元から、ついには大なる飛躍をとげて、「宇宙の法則」を直視する、最も敏感な心の持主にならねばならない。そこにあるとき、人はもはや欲望の生活者たることなく、道徳律のささやきとしての、自然の内奥からの神的な「証」をみるものでなくてはならない。だから、ソーローについて、N. Foersterは次の如くのべている。「ソーローは——略——もっとも純粋な超越論の典型 (Transcendental type) であった。ソーローはまさに凝視せる Transcendentalismの人であった」と。有名な Wallden pond を舞台に「自然」と一体化して、最も純粋な思索から、宗教的現実直視にすべてを賭けた人である。だから、ソーローをこの章のはじめで述べた「夢」の先駆とするに異存のあるはずはないし、そこに、ジェームズとの接点も見いだされるであろう。また、ソーローのいう狩猟人の次元から、宇宙の法則直視の心にまで高まっていくプロセスは有機的構造という Prof. Pollock の言葉をうらづけるものであろう。この点については後章で少しくふれることとしよう。

(3)

ジェームズは抽象としての概念思考の限界をみつめることから自己の哲学を展開していった。この場合、最終的には精神的なものを内容ある賭とする人間性の内的要求がつねに彼をささえてもいた。ジェームズにとって、感覚や理解をこえた超自然は宗教的信念であって、精神に真の輝きをあたえるものであった。それは彼の哲学の一方の極であった。しかし、他方、その精神を一そう鼓舞する足場として「自然」とその合理的思考も大いに尊重されねばならなかった。自然における合理的思考ということは真の意味でのプラグマ (行動) のかくことのできない要因である。たとえば、

その頃、ハーバート大学で活躍していた博物学者 L. R. Agassiz からジェームズは大なる示唆をうけたという。ジェームズはアガシー教授と一緒に自然科学の研究をしたのが後の哲学の基調となっていると、事実、「Pluralistic Universe」(多元的宇宙)の最後部に積極的に科学が説かれているのではないかというのも興味がある(6)。ジェームズにとって現実の特殊としての個々の事実はそれが経験の切札となり、彼の哲学の骨子である。だから、ここでも Pollock 教授のいう有機的関連からうまれた哲学として現実のもつ比重はきわめて高い。

さて、彼の宗教論 (The Varieties of religious experience) には二つの型があった。この二つの型 healthy-mindedness と sick soul は無論、便宜上わけられたものであろうし、ジェームズ自身も他の人々と同じように、healthy と sick の両極のあいだをいききしているのであると考えべきであろう。(1) で述べた Prof. Pollock 流にいうならば、有機的構造としての精神性 spirituality そのものが、人間の心としての healthy と sick の二面をもっているということになる。

ジェームズのいう「心」は心理学、哲学、宗教でそれぞれの表現となって現れるわけである。しかしながら、そのすべての代表に有名な「意識のながれ」がある。彼の心理学書(7)のなかで意識の流れが説かれているのだ。絶対に多元としての意識であって、ロックやヒュームの説く静止した、固着化した心理分析ではない。部分が集まって連想的に互に結合する従来の経験論の観念連合の考えかたでなく、また理性のような超越的自我によって不連続を連続化するというのでもない。いわば、写真にとられた断片の馬は非現実であるのに対して、「生きて動く馬」こそジェームズの目指すところである。過去と未来を分存させる孤立した「現在」ではない。意識とは純粋経験の連続したものという他ない。

上記の意識はジェームズによると、実質的 substantive と移行的 transitive の二面に分けられることになる。たしかに心はある一点に固着した状態であると同時に、突然、全く別のことに飛躍した

りするという機能をジェームズは指摘しているのである。彼は移行的状態に興味をもつが、それは意識的に研究しようとすればもはや失なわれ、不明瞭化する分野でもある。ちょうど暗やみを知らうと電気をつけるようなものに等しいというのだ。これは本来、分析不可能な機能でもある。この意識の二面性はベルグソンにおいても精緻に考察された。ベルグソンによれば、等質的な空間に投写された自我の影と、たえず移行し、漠然としていて無限に動いている異質な自我である。これはベルグソンによれば根底的自我と呼ばれる。数量的成立をその契機とする、等質空間に投写された自我と、無意識に流れている、不連続的異質的自我意識である。この場合、等質的空間の次元は過去から現在に浸入してくるものと考えられ、異質な流れている自我は未来に働かしかけていると考えられている。流れて流れないという二面性は興味深い意識論を期待させる。ジェームズの場合、移行的自我が意識そのものの積極的構成要素であるのを考えると、彼の絶対的多元論の哲学の核心は意識論の分析によって一そう明確化されるのである。宗教論の場合でも、宗教的心情は過去的同質的思惟、未来的異質的意識の二者の対立を問題とすると、より具体的にそれを把握できると、少くとも、それに役立つと私は思う。

ジェームズは、自我の構成要因として同じように主我（I）と客我（Me）の両者を対立させる（8）。meとは知られたる自我（the self as known）である。ベルグソン流に言えば、空間的等質的なmeということになる。反省的で、比量的、固定的な自我の部分である。だから、われわれが客観とよんでいる指標はこの領域から生じるとされる。それは抽象の結果にすぎないことになる。この客我（me）は三種に分けられる。第一に物質的meである。物質的meは身体的欲求、本能、獲得などから生じるものである。第二は社会的meであって、人を喜ばせたり、人から注目されたいなどの欲望からの所産であるものである。要するに、両者は功利の立場から意識のなかに蓄積、固定されたものである。客我としてのmeは第三の「精神的客我」（the spiritual me）にまで高められてくる。それは全体的な心の能力と傾向の所産であり、第一、第二の客我を包括している。そして、このmeは客我の中心であり、生命の聖域（the very sanctuary of our life）としての活動感（the sense of activity）を持っているとさえ表現される。もはや、固定され静止された領域に止まることで満足しない活動性をもって、第一、第二のmeに会いにでていくのである。功利の立場からの第一、第二のmeは自己自身の最も広く、高まりをもった精神的meに到達して、現実的功利を超えた新たらしい価値体験をすることになる。すなわち、宗教的感情に達するのだ。まさに、必然的に逢着するのである。そのかぎりでは宗教は反省的思惟の所産である。また、spiritual meはジェームズによって実に活動的、能動的に表現されているが、あくまでも反省的過去の思惟の結果であることにおいて、第一、第二のmeと変ることはない。だから客観的に知られた事象の総体である。本来的な意識の異質的緊張感とは別問題である。

次に主我（I）が問われねばならない。それは意識の基体としての流れるものとしての自我領域である。meのような集合体（aggregate）ではない。一切の思惟する主体は本性上規定しえない。もし規定されたなら、それは固定化、同質化の地平に移行してしまう。経験的実感として、自己の経過する意識状態を凝視するほかないものである。意識の結合は結果（effect）なのであり、まったく別の実体を予測するというにすぎない。ばらばらの単位であるmeをいかに統合してもそれは固定した空間の拡がりにはすぎない。時間をあたえ生きた現在になるためにはなにか媒質（medium）がなくてはならないというのである。ちょうど、ヒュームが「想像」によって観念相互の自由な結合をはかったように。ただ、ヒュームではまさに客我（me）に重点がおかれ、そのみ対象とすることで終わってしまった。ジェームズでは主我と客我の分析は行なわれても、精神と物体というあの

二元論にまでさかのぼることはない(9)。彼が純粹経験というとき主観、客観の対立はない。主我と客我がそれぞれの系列をつくっていて、その二者は交叉しているともいう。その交叉点上にあるのが意識である。表現するもの、されたものというとき対立は生じるが、それらは意識の機能的属性にすぎないのであって、純粹な意味で意識そのものは中性的な「流れ」という他ないとジェームズはいう(10)。

これは、まさにアメリカニズの典型と Pollock の指摘した考えかたであろう。総合的に、有機的に現実を把握するという傾向は以上のジェームズの意識論においてもそのままではまり得る。さらにジェームズの意識論(自我論)は、彼の宗教論にどう関連性をもっているかを、次章でみてみようと思う。

(4)

ジェームズの宗教論における宗教感情という場合、「健全な精神」(healthy-mindedness)と「病める魂」(sick soul)がとり扱われねばならない。前者は一度生れ型(once born)である。この場合の宗教的幸福は本性的には、生得のもの、素朴な宇宙的感動である。具体的には、不幸と悪が自己をとり囲んでもすべて信頼すればよしとされるものである。健全な精神では自己と世界への反省的思惟、その分析は第二義的なことである。神は厳格な審判者というよりは世界に調和をあたえる慈悲と恩寵の象徴である。人生は善と身をまかしきれる人である。この意識構成は著しく主観的である。たとえば私は善におとらず野性的なものを愛する、といった命題もすべての段階の healthy-mindedness を予測させる。それは主観的で、無自覚的である。ジェームズの心理学における I と me の対立の場合の I (主我)に本性上符合するものである。心理学では Self における I と me は機能的属性にすぎないものであった。意識の流れとしての純粹経験とその属性といってもよい。だから、そこでは未開人、あるいはソーローのいう狩猟人に、さらにソーロー自身、ホイットマン、エマーソン等にあてはまり、本来の自己はそこでは容易に対象と同一化するのである。自己意識は属性としての主我(I)の系列を強調したものと考えてよいであろう。そこでは、苦悩としての宗教感情は本来の場をみいだせない。価値と価値の葛藤の場として、苦しみは客我(me)の領域にあった(心理学)。客我が過去に埋没していくもの、記憶と比量を原理とするなら、主我は未来にはたらきかける今(瞬間)の連続である。自己をそのまま開示して自足しうる healthy-mindedness は主我の領域がその根拠であるのでないか。かくして、没入しうる宗教感情が生まれる。

さて、価値の葛藤、混乱は客我(me)においてみられた。過去の反省的思惟は本来、非未来的である。意識は実質としての等質性にとどまり、挫折は「悪」とみなされ、病める魂が発生する。世界や人生の真実はその悪にむけられるとき、はじめて明白となるというのである。彼の心理学では三種の客我が考えられていた。第一の物質的、第二の社会的客我(me)は外部と自己との対立から成立する。そして、外部自然界や人間相互の対立が挫折に終るとき悪がうまれる。最終的には第三の精神的客我において、自己への思惟が挫折に終るとき、根元的悪が成立する。これこそ sick soul であり、「原罪」にまでいたる罪としての悪である。ジェームズはいう。「たとい、まったく自己のメランコリーに妨げられないとしても、健全な精神は哲学説として不充分である。なぜなら、それがあくまで説明を拒否する悪の事実は実在の真の部分であるから。結局、それら(悪)は人生の意味を開く最良の鍵であって、われわれの眼に最深の真理を開き示すものであるかもしれない」(11)、という言葉が、ジェームズの自己の立場を示しているともいえよう。反省的思惟は悪

から一元としての神を予測せざるを得ないことになる。

一方、ジェームズの存在論は多元として、あくまで非決定である。多の瞬間における同時性が彼の根本的経験論の洞察の対象である。「神々が存するのを頑固に信ずることによって、宇宙にたいしてもっとも深い奉仕をしているのだとの気持こそ、なぜこういう気持にさせられるか分からないが、それは宗教的仮説の生きた本質 (the living essence) をなしているようだ」(12)、とのジェームズの言はやはり、多元論としての開いた宗教 (healthy-mindedness) を予感させるものである。とすれば、ジェームズの宗教的態度はあくまで楽観論である。悪をいかに位置づけるか、があらためて問われねばならない。

(注)

- (1) American Philosophy and the Future, edited by Novak, Scribner's, 1968
- (2) ibid. P. 62
- (3) ibid. P. 66
- (4) Twentieth century interpretation of Wallden, Prentice Hall 1968 P.85~92
- (5) 森の生活 (Wallden) 神吉訳 P.60
- (6) The philosophy of William James, by Flournoy 1917 P.23~24
- (7) Psychology (briefer course), by W. James Chapter 2
- (8) ibid. Chapter 3, P. 43~83
- (9) Does "Consciousness" exist?, by W. James
- (10) ibid
- (11) Varieties, P. 160
- (12) The Will to believe, X :